難船小僧

夢野久作

船長（おやじ）の横顔をジッと見ていると、だんだん人間らしい感じがなくなって来るんだ。骸骨を渋紙（しぶがみ）で貼り固めてワニスで塗上げたような黒いガッチリした凸額（おでこ）の下に、硝子球（ガラスだま）じみたギョロギョロする眼玉が二つコビリ付いている。マドロス煙管（パイプ）をギュウと引啣（ひっくわ）えた横一文字の口が、旧式軍艦の衝角（しょうかく）みたいな巨大（おおき）な顎（あご）と一所（いっしょ）に、鋼鉄の噛締機（バイト）そっくりの頑固な根性を露出（むきだ）している。それが船橋（ブリッジ）の欄干（クロス）に両肱（ひじ）を凭（も）たせて、青い青い秋空の下に横たわる陸地（おか）の方を凝視（みつ）めているのだ。

そのギロリと固定した視線の一直線上に、巨大な百貨店らしい建物の赤い旗がフラフラ動いている。その

周囲に上海(シャンハイ)の市街(まち)が展開している上をフウワリと白い雲が並んで行く。

……といったような無事平穏な朝だったがね。昭和二年頃の十月の末だったたっけが……。

足音高く船橋(ブリッジ)に登って行った俺は、その船長(おやじ)の背後(うしろ)でワザと足音高く立停まった。

「おはよう……」

と声をかけたが渋紙面(しぶがみづら)は見向きもしない。何(なん)しろ船長仲間でも指折(ゆびおり)の変人だからね。何か一心に考えていたらしい。

俺は右手に提げた黄色い、四角い紙包(かみづつみ)を船長の鼻

の先にブラ下げてキリキリと回転さした。

「御註文の西蔵（チベット）紅茶です。やッと探し出したんです」

船長（おやじ）はやっと吃驚（びっくり）したらしく首を縮めた。無言のまま六尺（しゃく）豊かの長身をニューとこっちへ向けて紅茶を受取った。

「ウウ……機関長（おやかた）か……アリガト……」

とプッスリ云った。コンナ時にニンガリともしないのがこの渋紙船長の特徴なんだ。取付（とりつ）きの悪い事なら日本一だろう。こんな男には何でも構わない。殴られたらなぐり返す覚悟でポンポン云ってしまった方が、早わかりするものだ。

「……昨夜(ゆんべ)、陸上(おか)で妙な話を聞いて来たんですがね。今度お雇いになったあの伊那(いな)一郎って小僧ですね。あの小僧は有名な難船小僧っていう曰(いわ)く附きの代物(しろもの)だって、皆(みんな)、云ってますぜ」

俺はそう云いさしてチョックラ船長(おやじ)の顔色を窺(うかが)ってみたが、何の反応も無い。相も変らず茶色の謎語像(スフィンクス)みたいにプッスリしている。無愛相(ぶあいそう)の標本だ。

「あの小僧が乗組んだ船はキット沈むんだそうです。Ｉ(アイ)・Ｉ(イ)・ＮＡ(ナ)って聞くと毛唐(けとう)の高級船員なんか慄(ふる)え上るんだそうです。乗ったら最後どんな船でも沈めるってんでね。……だから今度はこのアラスカ丸が危(あぶね)えっ

てんで、大変な評判ですがね。陸上の方では……」
　これだけ云っても船長の渋紙面は依然として渋紙面である。ネービー・カットの煙をプウと吹いた切り、軍艦みたいな顎を固定してしてしまった。しかし黒い硝子球は依然として俺の眼と鼻の間をギョロリと凝視している。モット俺の話を聞きたがっているらしいんだ。
「あの小僧は小ちゃくて容姿が美いので毛唐の変態好色連中が非常に好くんだそうです。あの小僧も亦、毛唐の高級に抱かれるとステキに金が儲かるんで、船にばっかり乗りたがるんだそうですが、不思議な事

にあの小僧が乗った船で、沈まない船は一艘(そう)も無いんだそうです。初めてあの小僧を欧州航路に雇傭(チャータ)した郵船のバイカル丸が、ジブラルタルで独逸(ハン)のＵ何号かに魚雷(ヤキイモ)を喰(く)わされた話は誰でも知っているでしょう。そん時に漂流端舟(ながれボート)に這(は)い上ってハンカチを振ったのが彼小僧(あいつ)のＳＯＳの振出(ふりだ)しだそうですがね。……それから第二丹洋丸がスコタラ沖でエムデンにアッパーカットを喰わされた時も、あの小僧は丁度、新式救命機の着込み方のモデルにされていたところだったそうで、そのまんま飛込んで助かっちまったんだそうです。……まあ運の良(い)い奴といえばいえましょうが、彼小僧(あいつ)の

運が良いたんびに船全体の運命がメチャメチャになるんだから敵いません。……まだ他にも二三艘、大きな船を沈めているんだそうですが、そんなに大きな船でなくとも、チョット乗った木葉船でも間違いなく沈めるってんで、迚も凄がられているんです。早い話が房州通いの白鷺丸にチョイと乗組んだと思うと、直ぐに横須賀の水雷艇と衝突させる。毛唐の重役の随伴をしてブライトスター石油社の超速自働艇に乗ると羽田沖で筋斗返りを打たせるといった調子で、どこへ行っても泣きの涙の三りんぼう扱いにされているうちに、運よく神戸でエムプレス・チャイナ号のＡクラス・ボー

イに紛れ込んで知らん顔をして上海まで来た。そいつを、どこかで伊那の顔を見識(みし)っていた毛唐の一等船客が発見して、あの小僧(ボーイ)と一所なら船を降りると云って騒ぎ出した。そこで今度は事務長が面喰(めんくら)って、早速小僧を逐出(おいだ)しにかかったが、小僧がなかなか降りようとしない。食堂の柱へ噛(かじ)り付いて泣き叫ぶ奴を、下級船員が寄ってたかって、拳銃(ピストル)や鉄棒(パイプ)を突付(つきつ)けてヘトヘトになるまで小突きまわして、泥棒猫でも逐(お)い出すようにして桟橋へたたき出してしまった。そこで小僧はエムプレス・チャイナの給仕服(ユニフォーム)のまま生命辛々(いのちからがら)の手提籠(バスケット)一個(ひとつ)を抱えて税関の石垣の上でワイワイ泣いているの

を、チャイナ号の向い合わせに繋留(かか)っていたアラスカ丸の船長……貴下(あなた)が発見(みつけ)て拾い上げた……チャイナ号へ面当(つらあて)みたいに小僧の頭を撫(な)でて、慰め慰め拾い上げて行った……という話なんです。現在、陸上(おか)では酒場(のみや)でも税関でも海員(ふね)の奴等(やつら)が寄ると触(さわ)るとその噂(うわさ)ばっかりで持切(もちき)ってますぜ。アラスカ丸の船長(おやじ)はそんな曰(いわ)く因縁、故事来歴附の小僧だって事を、知って拾ったんだか……どうだかってんでね。非道(ひど)い奴はアラスカ丸が日本に着くまでに沈むか、沈まないかって賭(かけ)をしている奴なんか居るんですぜ」

俺は元来デリケートに出来た人間じゃない。君等(きみら)み

たいな高等常識を持った記者諸君に「海上の迷信」なんて鹿爪(しかつめ)らしい、学者振った話なんか出来る柄じゃ、むろんないんだ。尤(もっと)も若いうちは不良の文学青年でバイロンの「海の詩」なんかを女学生に暗誦(あんしょう)して聞かせたりなんかして得意になっていたもんだがね。しかしそれから後(のち)、永年荒っぽい海上生活を続けて来たお蔭で性根(しょうね)が丸で変ってしまった。身体(からだ)こそこんなに貧弱な野郎だが、兇状持揃(きょうじょうもちぞろ)いの機関室でも、相当押え付けるだけの腕(うで)ッ節(ぷし)と度胸だけは口幅(くちはば)ったいが持っているつもりだ。現に船員連(ふねじゅう)中から地獄の親方と呼ばれている位だ。……けども、その俺が、この渋紙船長(おやじ)の

前に出ると、出るたんびに妙に顔負けしてしまう。いつもこうしてペラペラと安っぽく喋舌らせられるから妙なんだ。しかも忠告する気で云っている話が、ツイお伽話か何ぞのようにフワフワと浮付いてしまう。圧しの利かない事夥しい。

「何も御幣を担ぐんじゃありませんがね。そんな箆棒な話が在るかって反対もしてみたんですがね。今まであの小僧が乗った船が一艘残らず沈んだのが事実だったら、今度沈むのも事実に違いない。乗組員全体の生命にも拘わる話だ。何もあの小僧が居なけあ船が出ねえって理窟もあるめえし……お前んとこの船長がい

くら変者だってそんな無鉄砲な酔狂をして乗組員を腐らせるような馬鹿でもあんめえ。あの小僧の曰く因縁、故事来歴を知らねえから平気で雇ったに違えねえんだ。悪い事あ云わねえから早く船長に話して、あの小僧を降してもらいな。多人数の云う事あ聴いとくもんだ。あとで必定後悔するもんだから……てな事を皆して色々云うもんですからね……ハハハ……」

船長の表情は依然として動かない。渋紙色の仮面が、頭の上の青空に凍り付いたように動かない。無表情もここまで来ると少々精神異状者じみて来る。俺は思い切りブツカルように云った。

「今の中に降しちゃったらどうです」
船長の左の眼の下にピクピクと皺が寄った。同時に片目を半分ほど細くして、唇の片隅を上の方へ歪めた。これがこの船長の笑い顔なんだが、知らない人間が見たらとても笑い顔とは思えない。単なる渋紙の痙攣としか見えないいだろう。
「郵船名物のS・O・S・BOYだろう」
と船長が嗄れた声でプッスリと云った。同時に眉の間と頬ペタの頸筋近くに、新しい皺が二三本ギューと寄った。冷笑しているのだ。
「エヘッ、知ってるんですか。貴方も……」

「ムフムフ……」
と船長が笑いかけて煙草(たばこ)に噎(む)せた。船橋(ブリッジ)から高らかに唾液(つば)を吐いた。
「ムフムフ、知らんじゃったがね。皆(みんな)、そう云うとる」
「皆(みんな)って誰がですか。どんな連中が……」
「船中(ふねじゅう)で云うとるらしい。水夫の兼(かね)の野郎が代表で談判に来た。ツイ今じゃった」
「ヘエ……何と云って」
「下(おろ)さなければあの小僧をたたき殺すが宜(え)えかチウてな。胸の処の生首(なまくび)の刺青(いれずみ)をまくって見せよった。ムフムフ」

「ヘエ。それで……下さないんですか」
船長が片目を静かに閉じたり開いたりした。それからネービー・カットの煙(けむ)を私の顔の真正面(ましょうめん)に吹き付けた。
「……迷信だよ……」
「それあそうでしょうけどね。迷信は迷信でしょうけどね」
「ムフムフ。ナンセン小僧をノンセンス小僧に切り変えるんだ。迷信が勝つか。俺達の動かす器械が勝つかだ」
「つまり一種の実験ですね」

「……ムフムフ。ノンセンスの実験だよ」

「…………」

二人の間に鉄壁のような沈黙が続いた。船長は平気でコバルト色の煙をプカプカやり出した。俺は、どうしたらこの船長を説き伏せる事が出来るかと考え続けた。

「君はいつからこの船に乗ったっけなあ」

と船長が突然に妙な事を云い出した。

「一昨年の今頃でしたっけなあ」

「乗る時に機械は検査したろうな」

「しましたよ。推進機（スクリュウ）の切端（きっぱし）まで鉄槌（ハマ）でぶん殴ってみ

ましたよ。それがどうかしたんですか」
「ムフムフ。その時に機械の間に、迷信とか、超科学の力とか、幽霊とか、妖怪とか、理外の理とかいうものが挟まったり、引っかかったりしているのを発見したかね。君が検査した時に……」
「それあ……そんな事はありません。この船の機械は全部近代科学の理論一点張りで出来て動いているんですがね」
「現在でもそうかね」
「…………」
「そんなら……宜えじゃろ。中学生にでもわかる話

じゃろ。あのＳ・Ｏ・Ｓ小僧が颱風（たいふう）や、竜巻（スパウト）や、暗礁（リーフ）をこの船の前途（コース）に招寄（よびよ）せる魔力を持っちょる事が、合理的に証明出来るチウならタッタ今でもあの小僧を降す」

「…………」

「元来、物理、化学で固まった地球の表面を、物理、化学で固めた船で走るんじゃろ。それが信じられん奴は……君や僕が運用する数理計算が当てにならんナンテいう奴は、最初（はな）から船に乗らんが宜（え）え」

俺はギューと参ってしまった。一言（いちごん）ない……面目（めんぼく）ない……と思って残念ながら頭を下げた。

「ムフムフ。シッカリし給え。オイオイ伊那一郎……S・O・S……ハハハ。ここだここだ……上っち来い」

船長を探すらしく巨大なバナナを抱えて船長室を駈出して行く青服の少年を船長は手招きして呼び上げた。俺が買って来た西蔵紅茶の箱を、鼻の先に突付けて命令した。

「これを船長室へ持って行て蒸留水で入れちくれい。地獄の親方と一所に飲むけにナ」

「CAPTAIN」と真鍮札を打った扉を開くと強烈な酸類、アルカリ類、オゾン、アルコオルの異臭がムラムラと顔を撲つ。その中に厚硝子張、樫材の固

定薬品棚、書類、ビーカー、レトルト、精巧な金工器具、銅板、鉛板、亜鉛板、各種の針金、酸水素瓦斯筒、電気鎔接機、天秤、バロメータなんぞが歯医者か理髪店の片隅みたいにゴチャゴチャと重なり合っている……というのがこのアラスカ丸の船長室なんだ。その片隅の八日巻の時計の下の折釘に、墨西哥かケンタッキーの山奥あたりにしかないようなスバらしく長い、物凄い銀色の拳銃が二挺、十数発の実弾を頬張ったまま並んで引っかかっているのだ。

　話は脱線するがこのアラスカ丸の船長はむろん独身生活者で、女も酒も嫌いなんだ。上陸なんか滅多

にしないんだ。その代りに応用化学の本家本元の仏蘭西(フランス)の大学で、理学博士の学位を取っている一種の発明狂と来ているんだ。持っているパテントの数(すう)でも十や二十じゃ利かないだろう。みんなこの実験室でヒネリ出したっていうんだから豪勢なもんだろう。去年の冬だっけが、そんなパテントの権利も、巨万の財産も海員擁済会(ようさいかい)に寄附して、胃癌(いがん)で死んじゃったが、惜しい人間だったよ。……その時分……昭和二年頃には、小型な、軽い、無尽蔵に強力な乾蓄電池の製作に夢中になっていたっけ。世界中の動力を蓄電池の一点張りにするてんで、誠に結構な話だが、その実験をするた

んびに、船中の電動力を吸い集めて、電燈を薄暗くしちまったりヒューズを飛ばしたりするのには降参させられたよ。おまけに舶来の絹巻線（きぬまきせん）が気に入らないと云って、自分で器械を作って絹巻線を製作しては切り棄（す）てて、作っては切り棄てる事二万哩（マイル）。その仕事に行き詰まると、今のピストルを二挺持って上甲板（じょうかんぱん）に駈（か）け上る。主檣（メーンマスト）に群がる軍艦鳥を両手でパンパンと狙（ねら）い撃（うち）にして「アハハハハ」と高笑いしながら、落ちて来るのを見向きもしないでスタスタと実験室に引返（ひきかえ）すという変りようだからトテモ吾々（われわれ）凡俗には寄付（よりつ）けない。恐ろしく小面倒な動力の計算書なんかを一週間がかり

で書き上げて甲板（デッキ）に持って行くと、「アリガトウ」と云って、見る片端（かたはし）から一枚一枚海の風に飛ばしてしまう。……ナアニ、タッタ一目でみんな頭に入れちゃうんだ。ズット後（のち）になって船体検査なんかが来ると自分で機械の側へ立って、何百という数字を暗記（そら）でペラペラ並べるんだから、計算した本人が舌を捲（ま）いちまう。……そうかと思うと独逸（ドイツ）の潜航艇やエムデンの出現時間と、場所をギッシリ書き入れた海図を睨（にら）んで「モウわかった。彼奴等（きゃつら）の根拠地と、通信網と、速力がわかった」と云うとその海図をクシャクシャにして海へ飛ばす。それから毛唐（けとう）の嫌う金曜日金曜日に汽笛を鳴らし

て、到る処の港々を震駭(しんがい)させながら出帆(しゅっぱん)する、倫敦(ロンドン)から一気に新嘉坡(シンガポール)まで、大手を振って帰って来る位の離れ業(わざ)は平気の平左なんだから、到底吾々(われわれ)のアタマでは計り知る事の出来ないアタマだよ。

　そうした一種の鬼気(すごみ)を含んだ船長の顔と、部屋の隅でバナナを切っている伊那少年の横顔を見比(みくら)べると、まるで北極と南洋ほど感じが違う。

　毬栗(いがぐり)の丸い恰好(かっこう)のいい頭が、若い比丘尼(びくに)みたいに青々としている。皮膚の色は近頃流行のオリーブって奴だろう。眼の縁(ふち)と頰(ほお)がホンノリして唇が苺(いちご)みたいだ。睫毛(まつげ)の濃い、張りのある二重瞼(ふたえまぶた)、青々と長い三日

月眉（まゆ）、スッキリした白い鼻筋、紅（あか）い耳朶（みみたぼ）の背後（うしろ）から肩へ流れるキャベツ色の襟筋（えりすじ）が、女のように色っぽいんだ。青地に金モールの給仕服（ユニフォーム）が身体（からだ）にピッタリと吸付（すいつ）いているが、振袖（ふりそで）を着せたら、お化粧をしなくとも坊主頭のまんま、生娘（きむすめ）に見えるだろう。なるほど毛唐（けとう）が抱いてみたがる筈だ……と思っているトタンに、白いバナナの皿を捧げた小僧がクルリとこっち向きになって頭を一つ下げた。俺の顔を、憐（あわ）れみを乞（こ）うようにソッと見上げた。それから恋人に出会った少女みたいな桃色の、悩ましげな微笑を一つニッコリとして見せたもんだ。

俺はゾッとしてしまったよ。……まったく……魔物らしい妖気が、小僧の背後(うしろ)の暗闇(くらやみ)から襲いかかって来たように思ったもんだよ。

俺は紅茶もバナナも良(い)い加減にして故郷の地獄……機関室へ帰って来た。今にも「オホホホ」と笑い出しそうな人形じみた小僧の、変態的な愛嬌顔(あいきょうづら)と向い合っているよりも、機関室の連中の真黒な、猛獣面(づら)と睨(にら)み合っている方が、ドレ位気が楽だか知れないと思って……。

ところが機関室に帰ってみると船員の伊那少年に対

する憎しみが……否(いな)、恐怖が、予想外に酷(ひど)いのに驚いた。船長(おやじ)が是非ともあの小僧を乗組ませると云うんならこっちでも量見がある……というので大変な鼻息だ。水夫(デッキ)連中は沖へ出次第に小僧を餌にして鱶(ふか)を釣ると云っているそうだし、機関室の連中は汽罐(ボイラ)に突込(つっこ)んで石炭の足しにするんだと云ってフウフウ云っている。海員なんてものはコンナ事になると妙に調子付いて面白半分にドンナ無茶でも遣(や)りかねないから困るがね。現に水夫の中でも兄い分の「向(むこ)う疵(きず)の兼(かね)」がわざわざ鉄梯子(ばしご)を降りて、俺に談判を捻(ね)じ込んで来た位だ。

「向う疵の兼」というのは恐ろしい出歯(でば)だから一名

「出歯兼(でばかね)」ともいう。クリクリ坊主の額(おでこ)が脳天から二つに割れて、又喰付(くいつ)き合った創痕(きずあと)が、眉(まゆ)の間へグッと切れ込んでいるんだ。そいつが出刃包丁(でばぼうちょう)を啣(くわ)えた女の生首(なまくび)の刺青(ほりもの)の上に、俺達の太股(もも)ぐらいある真黒な腕を組んで、俺の寝台(ねだい)にドッカリと腰を卸(おろ)して出(で)ッ歯(ぱ)をグッと剥(む)き出したもんだ。

「チョットお邪魔アしますが親方ア。今、船長(おやじ)の処(とこ)へ行って来たんでがしょう。親方ア」

「ウン。行って来たよ。それがどうしたい」

「すみませんが船長(おやじ)があの小僧の事を何と云ってたか聞かしておくんなさい。……わっしゃ親方が船長に何

とか云ったらしいんで、水夫（デッキ）連中の代表になって、船長（おやじ）の云い草を聞かしてもらいに来たんですが」

「アハハハ。それあ御苦労だが、何とも云わなかったよ」

「お前さん何にも船長（おやじ）に云わなかったんけエ」

「ウン。ちょっと云うには云ったがね。何も返事をしなかったんだ。船長（おやじ）は……」

「ヘエー。何も返事をしねえ」

「ウン。いつもああなんだからな船長（おやじ）は……」

「あの小僧を大事（でえじ）にしてくれとも何とも……親方に頼まなかったんけえ」

「馬鹿。頼まれたって引受けるもんか」
「エムプレス・チャイナへ面当(つらあ)てにした事でもねえんだな」
「むろんないよ。船長(おやじ)はあの小僧を、皆(みんな)が寄って集(たか)って怖がるのが、気に入らないらしいんだ」
「よしッ。わかったッ。そんで船長(おやじ)の了簡(りょうけん)がわかったッ」
「馬鹿な。何を云うんだ。船長(おやじ)だって何もお前達の気持を踏み付けて、あの小僧を可愛がろうってえ了簡じゃないよ。今にわかるよ」
「インニャ。何も船長(おやじ)を悪く云うんじゃねえんでがす。

此船(うち)の船長(おやじ)と来た日にゃ海の上の神様なんで、万に一つも間違いがあろうたあ思わねえんでがすが、癪(しゃく)に障(さわ)るのはあの小僧でがす。……手前の不吉(いや)な前科(こうら)も知らねえでノメノメとこの船へ押しかけて来やがったのが癪に触(さわ)るんで……遠慮しやがるのが当前(あたりまえ)だのに……ねえ……親方……」

「それあそうだ。自分の過去を考えたら、遠慮するのが常識的だが、しかし、そこは子供だからなあ。何も、お前達の顔を潰(つぶ)す気で乗った訳じゃなかろう」

「顔は潰れねえでも、船が潰れりゃ、おんなじ事でさあ」

「まああそう云うなよ。　俺に任せとけ」

「折角だがお任かせ出来ねえね。　この向う疵（きず）は承知しても他（はた）の奴等（やつら）が承知出来ねえ。　可哀相（かわいそう）と思うんなら早くあの小僧を卸（おろ）してやっておくんなさい。　面（つら）を見ても胸糞（むなくそ）が悪いから」

「アッハッハッ。　恐ろしく担ぐじゃねえか」

「担ぐんじゃねえよ。　親方。　本気で云うんだ。　この船がこの桟橋を離れたら、　あの小僧の生命（いのち）がねえ事ばっかりは間違いねえんで……だから云うんだ」

「よしよし。　俺が引受けた」

「ヘエ。　どう引受けるんで……」

「お前達の顔も潰れず、船も潰れなかったら文句はあるめえ。つまりあの小僧の生命を俺が預かるんだ。船長が飼っているものを、お前達が勝手にタタキ殺すってのは穏やかじゃねえからナ。犬でも猫でも……」

「ヘエ。そんなもんですかね。ヘエ。成る程。親方がそこまで云うんなら私等あ手を引きましょうが、しかし機関室の兄貴達に、先に手を出されたら承知しませんよ。モトモトあの小僧は甲板組の者ですからね」

「わかってるよ。それ位の事あ」

「ありがとうゴンス。出娑婆った口を利いて済みません。兄貴達も容赦して下せえ」

と会釈をして兼は甲板へ帰った。生命(いのち)知らずの兇状持(きょうじょうもち)ばかりを拾い込んでいる機関部へ来て、これだけの文句を並べ得る水夫は兼の外には居ない。現に機関部の連中は、私の寝室(へや)の入口一パイに立塞(たちふさ)がって、二人の談判に耳を傾けていたが……むろんデッキ野郎の癖に、わざわざ親方の私の処へ押しかけて来る兼の利いた風な態度を憎んで、今にも飛びかかりそうな眼付(めつき)をしながら扉(ドア)の蔭に犇(ひしめ)いていたものであるが、兼が「兄貴達も容赦してくれ」と云って頭をグッと下げた会釈ぶりが気に入ったらしく、皆顔色を柔らげて道を開(あ)けて通してやった。平生(ふだん)なら甲板から塵(ちり)一本、

機関室へ落し込んでも、只（ただ）はおかない連中であるが……。

　そんな訳で、風前の燈火（ともしび）みたような小僧の生命（いのち）を乗せたアラスカ丸が、無事に上海（シャンハイ）を出た。Ｓ・Ｏ・Ｓどころか時化（しけ）一つ喰（く）わずに門司（もじ）を抜けて神戸に着いた。それから船長（おやじ）一流の冒険だが六時間の航程（コース）を節約（つめ）るために、鳴戸（なると）の瀬戸の渦巻を七千噸（トン）の巨体で一気に突切って、御本尊のＳ・Ｏ・Ｓ・ＢＯＹを慄（ふる）え上がらせながら平気の平左で横浜に着いてしまった。

　横浜で印度（インド）綿花と南洋材を全部上げてしまうと、今

度は晩香坡(バンクーバ)行(ゆき)の木綿類を吃水(きっすい)一パイに積込(つみこ)む。同時にアラスカ近海の難航海に堪え得るだけの食料や石炭(すみ)を、船が割れる程突込(つっこ)む訳だが、その作業は平生(いつも)の通り二三日がかりで遣るのでさえ相当忙(せわ)しいのに、向岸(むこうぎし)の晩香坡(バンクーバ)から突然(だしぬけ)に大至急云々(うんぬん)の電報が来て、二十四時間以内の出帆(しゅっぱん)という事になったので、その忙がしさといったら話にならない。おまけに横浜市内の道路工事の影響(おかげ)とかで、臨時人夫(エキストラ)が間に合わないと来たので、機関部の石炭(すみ)運びなんかは、文字通りの地獄状態に陥ってしまったものだ。

それも一口に地獄と云っただけじゃ局外者(しろうと)にはわか

らないだろう。普通の客船（メイルボート）は別であるが、外国通いの気の利いた荷物船（カーゴボート）になればなるほど、荷物をウンと詰め込まれる。人間の通れる……荷役の出来る処ならばどこでも構わない。空隙（すきま）のあらん限り押し込んでしまうので、石炭を積む処は炭庫（すみぐら）以外に殆（ほと）んど無いと云っていい。そこへ今度のアラスカまわりみたいな難航路になると必要以上の石炭を積んでおかないとドンナ海難にぶつかって、どこへ流されるかわからないので、楕円形の船の胴体と、四角い部屋部屋が交錯して作っているあらゆる狭い、人間の通れないような歪（ゆが）み曲った空隙（くうげき）に石炭をギッシリと詰め込まなければなら

ない。その作業の危険さと骨の折れる事といったら、それこそこの世(よ)の生き地獄と云っても形容が足りないだろう。この船の料理部屋の背後(うしろ)の空隙なんかへ行く連中は、ドン底の水槽(タンク)の鉄蓋(てつぶた)まで突き抜けた鉄骨の隙間(すきま)に、一枚の板を渡して在る。左右の壁には火のような蒸気(スチーム)の鉄管(パイプ)が一面にぬたくっているので、通り抜けただけでも呼吸(いき)が詰まって眼がまわる上に、手でも足でも触れたら最後大火傷(おおやけど)だ。そこに濛々(もうもう)と渦巻く熱気と、石炭の粉の中に、臨時に吊(つる)した二百燭(しょく)光の電球のカーボンだけが、赤い糸か何ぞのようにチラチラとしか見えていない。そこを二三度も石炭籠(すみかご)を担いで往

復してから急に上甲板(じょうかんぱん)の冷(つ)めたい空気に触れると、眼がクラクラして、足がよろめいて、鬼のような荒くれ男が他愛なくブッ倒(た)おれるんだ。ところがブッ倒(た)おれたと見ると直ぐに、兄イ連(れん)が舷側(ふなばた)に引(ひき)ずり出して頭から潮水(しおみず)のホースを引っかけて、尻ペタを大きなスコップでバチンバチンとブン殴るんだから、息のある奴なら大抵驚いて立ち上る。

「見やがれ。コン畜生(ちくしょう)。死(くた)ばるんなら手際よくクタバレ」

といった調子である。残酷なようであるが、限られた人数(にんず)で限られた時間に仕事をしなければ、機関長の

沽券（こけん）にかかわるんだから止（や）むを得ない。所謂（いわゆる）、近代文明って奴の裡面（りめん）には到る処にこうした恐ろしい地獄が転がっているんだ。勿論、俺自身が、その中からタタキ上げて来たんだから部下に文句は云わさないがね……。

その俺が横浜桟橋のショボショボ雨の中に突立って、積込（つみこ）む石炭を一々検査していると汗と炭粉で菜葉服（なっぱふく）を真黒にした二等機関士（セカンド）のチャプリン髭（ひげ）が、喘（あえ）ぎ喘ぎ駈け降りて来て「トテモ手が足りません。何とかして下さい」と云うんだ。

「馬鹿。そう右から左へ人が雇えるか」

と一喝すると「それでもデッキの方で誰か一人でもいいんですから」と泣きそうな顔をする。
「馬鹿ッ。デッキの方だって相当忙がしいんだ。殴られるぞ」
「……でも船長室のボーイが遊んでいます」
「あんな奴が何の役に立つんだ」
「……でも、みんなそう云っているんです。この際、紅茶のお盆なんか持ってブラブラしている奴はタタキ殺しちまえって……」
「君から船長にそう云い給え」
「ドウモ……そいつが苦手なんで」

「よし。俺が云ってやろう」

忙がしいのでイライラしていた俺は、二等運転手(チャプリン)の話が五月蠅(うるさ)かったんだろう。そのまま一気にタラップを馳上(かけあが)って、船長室に飛込んだ。船長は相も変らず渋紙色の無表情な顔をして、湯気の立つ紅茶を啜(すす)っていた。傍の鉛張(なまりば)りの実験台の上で、問題の伊那少年が銀のナイフでホットケーキを切っていた。

俺は菜葉服のポケットに両手を突込んだまま小僧の無邪気な、ういういしい横顔をジロリと見た。

「この小僧を借してくれませんか」

伊那少年の横顔からサッと血の気が失(う)せた。魘(おび)えた

ように眼を丸くして俺と船長の顔を見比（みくら）べた。ホットケーキを切りかけた白い指が、ワナワナと震えた。……船長も内心愕然（ぎょっ）としたらしい。飲みさしの紅茶を静かに下に置いた。すぐに云った。

「どうするんだ」

「石炭（すみ）運びの手が足りないって云うんです。みんなブツブツ云っているらしいんです……済みませんが……」

「臨時は雇えないのか」

「急には雇えません。二十四時間以内の積込（つみこ）みですからね。明日（あした）の間（ま）になら合うかも知れませんが……皆（みんな）

モウ……ヘトヘトなんで……」
船長の額に深い竪皺が這入った。コメカミがピクリピクリと動いた。当惑した時の緊張した表情だ。こうした場合の、そうした船員の気持が、わかり過ぎる位わかっているんだからね。
それから船長は白いハンカチで唇のまわりを叮寧に拭いた。ソロソロと立ち上って伊那少年を見下した。伊那少年も唇を真白にして、涙ぐんだ瞳を一パイに見開いて船長の顔を見上げたもんだ。
その時の船長の云うに云われぬ悲痛な、同時に冷え切った鋼鉄のような表情ばかりは、今でも眼の底にコ

ビリ付いているがね。

船長はコメカミをピクピクさせながら大きく二度ばかり眼をしばたたいた。俺の顔をジッと見て念を押すように云った。

「大丈夫だろうな」

俺は無言のまま無造作にうなずいた。

俺と一所（いっしょ）に静かに、二三度うなずいた船長は伊那少年を顧みて、硝子（ガラス）のような眼球（めだま）をギラリと光らした。

決然とした低い声で云った。

「……ヨシッ……行けッ……」

「ウワア――アッ……」

と伊那少年は悲鳴を揚げながら船長室を飛出したが……その形容の出来ない恐怖の叫び、悲痛の響(ひびき)、絶体絶命の声が俺は、今でも思い出すたんびにゾッとする。伊那少年は石炭運びの恐ろしさを知っていたのだ。否(いな)、ソレ以上の恐ろしい運命が、石炭運びの仕事の中に入れ交(まじ)っているのを予感していたのだね。

しかし伊那少年は逃れ得なかった。船長室の外には、俺のアトから様子を見に来た向う疵の兼が立っていた。大手を拡げて伊那少年を抱きすくめてしまったもんだ。

「ギャア――。ウワアッ。助けて助けて……カンニンして下サアイ。僕はこの船を降りますから……どうぞ

どうぞ……助けてエ助けてエッ……」
「アハハハ。どうもしねえだよ。仕事を手伝いせえすれあ、ええんだ」
「許して……許して下さあい。僕……僕は……お母さんが……姉さんが家に居るんですから……」
伊那少年は濡れたデッキに押え付けられたまま、手足をバタバタさして泣き叫んだ。
「ウハハハハ。何を吐かすんだ小僧。心配しるなって事……俺が引受けるんだ。この兼が受合うたら、指一本指さしやしねえかんな。……云う事を聴かねえとコレだぞ」

兼は横に在った露西亜(ロシア)製の大スコップを引寄せた。そうして手を合わせて拝んでいる少年を片手で宙に吊(つる)した。小雨(こさめ)の中で金モール服がキリキリと廻転した。

「致します致します。何でも致します。……すぐに……すぐに船から下して下さい。殺さないで下さい」

「知ってやがったか。ワハハハハハハ」

兼は大口を開(あ)いて笑いながら私たちを見まわした。船長も二等運転手も、多分俺の顔も石のように剛(こわ)ばっていた。あんまり兼の笑い顔が恐ろしかったので……額(ひたい)の向疵(むこうきず)までが左右に開(ひら)いて笑ったように見えたので……。

「……サ柔順しく働らけ。誰も手前の事なんか云ってる奴は居ねえんだからな。ハハハ」

小雨の中に肩をすぼめて艙口を降りて行く伊那少年の背後姿は、世にもイジラシイ憐れなものであった。

そうして俺達はソレッキリ伊那少年の姿を見なかったのだ。

犬吠埼から金華山沖の燈台を離れると、北海名物の霧がグングン深くなって行く。汽笛を矢鱈に吹くので汽鑵の圧力計がナカナカ上らない。速力も半減で、能率の不経済な事夥しい。

一等運転手と船長と、俺とが、食堂でウイスキー入

りの紅茶を飲みながらコンナ話をした。
「今度は霧が早く来たようだね」
「すぐ近くに氷山がプカプカやっているんじゃねえかな。霧が恐ろしく濃いようだが……」
「そういえば少し寒過ぎるようだ。コンナ時にはウイスキー紅茶に限るて……」
「紅茶で思い出したがアノS・O・Sの伊那一郎は船長が降したんですか」
　船長は木像のように表情を剛ばらせた。無言のまま頭を軽く左右に振った。
「おかしいな。横浜以来姿が見えませんぜ」

「ムフムフ。何も云やせん。あの時、君に貸してやった切りだ」
「ジョジョ冗談じゃない。僕に責任なんか無いですよ。デッキの兼に渡した切り知りませんが、貴方も見ていたでしょう」
「殺(や)ったんじゃねえかな……兼が」
と云ううちに一等運転手(チーフメート)が自分でサッと青い顔になった。
「……まさか。本人も降りると云ってたんだからな……無茶な事はしまいよ」
「しかし降りるなら降りるで挨拶(あいさつ)ぐらいして行きそう

なもんだがねえ」
「ムフムフ。まだ船の中に居るかも知れん……どこかに隠れて……」
と船長が云って冷笑した。例の通り渋紙の片隅へ皺（しわ）を寄せて……硝子球（ガラスだま）をギョロリと光らして……。俺は何かしらゾッとした。そのまま紅茶をグッと飲んで立上った。
こうした俺たちの会話は、どこから洩（も）れたか判然（わか）らないが忽（たちま）ち船の中へパッと拡がった。
「捜し出せ捜し出せ。見当り次第海にブチ込め。ロクな野郎じゃねえ」

と騒ぎまわる連中も居たが、そんな事ではいつでも先に立つ例の向う疵の兼が、この時に限って妙に落付いて、

「居るもんけえ。飲まず食わずでコンナ船の中へ居れるもんじゃねえちたら。逃げたんだよ」

と皆を制したのでソレッキリ探そうとする者もなかった。しかし、それでも伊那少年の行方は妙に皆の気にかかってしまったらしく、狭い廊下や、デッキの片隅を行く船員の眼はともすると暗い処を覗きまわって行くようであった。

船を包む霧は益々深く暗くなって来た。

モウ横浜を出てから十六日目だから、大圏コースで三千哩（マイル）近くは来ている。ソロソロ舵（かじ）をE・S・Eに取らなければ……とか何とか船長と運転手が話し合っているが、俺はどうも、そんなに進んでいるような気がしなかった。しかもその割りに石炭の減りようが烈（はげ）しいように思った。これは要するに俺の腹加減で永年の経験から来た微妙な感じに過ぎないのだが、それでも用心のために警笛を吹く度数を半分から三分の一に減らしてもらった。同時に一時間八浬（ノット）の経済速度（エコノミカルスピード）の半運転を、モウ一つ半分に落したものだから、七千噸（トン）の巨体が蟻（あり）の匍（は）うようにしか進まなかった。

「オイ。どこいらだろうな」
「そうさなあ。どこいらかなあ」
といったような会話がよく甲板の隅々で聞こえた。
むろん片手を伸ばすと指の先がボーッと見える位ヒドイ霧だから話している奴の正体はわからない。
「汽笛（ふえ）を鳴らすと矢鱈（やたら）にモノスゴイが、鳴らさないと又ヤタラに淋（さび）しいもんだなあ」
「アリュウシャン群島に近いだろうな」
「サア……わからねえ。太陽も星もねえんだかんな。六分儀なんかまるで役に立たねえそうだ」
「どこいらだろうな」

「……サア……どこいらだろうな」

コンナ会話が交換されているところへ、老人の主厨が飼っている斑のフォックステリヤが、甲板に馳け上って来ると突然に船首の方を向いてピッタリと立停まった。クフンクフンと空中を嗅ぎ出した。同時にワンワンワンワンワンと火の附くように吠え初めた。

「オイ。陸だ陸だッ」

とアトから跟いて来た主厨の禿頭が叫ぶ。成る程、波の形が変化して、眼の前にボーッと島の影が接近している。

「ウワッ……陸だッ……大変だッ」

「後退(ゴスタン)……ゴスタン……陸(おか)だ陸だッ」

「大変だ大変だ。ぶつかるぞッ……」

ワアワアワアワアと蜂(はち)の巣を突(つつ)いたような騒ぎの中(うち)に、船は忽(たちま)ちゴースタンして七千噸(トン)の惰力をヤット喰止(くいと)めながら沖へ離れた。船首にグングンのしかかって来る断崖(だんがい)絶壁の姿を間一髪の瀬戸際まで見せ付けられた連中の額(ひたい)には皆生汗(なまあせ)が滲(にじ)んだ。

「あぶねえあぶねえ。冗談じゃねえ。汽笛(ふえ)を鳴らさねえもんだから反響がわからねえんだ。だから陸(おか)に近いのが知れなかったんだ」

「機関長の奴ヤタラにスチームを惜しみやがるもんだ

からな……テキメンだ」
「今の島はどこだったろう」
「セント・ジョジじゃねえかな」
「……手前……行ったことあんのか」
「ウン。飛行機を拾いに行った事がある」
「何だ何だセント・ジョジだって……」
「ウン。間違えねえと思う。波打際の恰好に見おぼえがあるんだ」
「篦棒めえ。セント・ジョジったらアリュウシャン群島の奥じゃねえか」
「ウン。船が霧ん中でアリュウシャンを突ん抜けて

白令海（ベーリング）へ這入（はい）っちゃったんだ」

「間抜けめえ。船長（おやじ）がソンナ半間（はんま）な処へ船を遣（や）るもんけえ」

「駄目だよ。船長（おやじ）にはもうケチが附いてんだよ。S・O・S小僧に祟（たた）られてんだ」

「でも小僧はモウ居ねえってんじゃねえか」

「居るともよ。船長（おやじ）がどこかに隠してやがるんだ。夜中に船長室を覗（のぞ）いたらシッカリ抱き合って寝てたっていうぜ」

「ゲエッ。ホントウけえ」

「……真実（まったく）だよ……まだ驚く話があるんだ。主厨（カカン）の話

だがね、あのS・O・S小僧ってな女だっていうぜ。……おめえ川島芳子ッてえ女知らねえか」
「知らねえね。○○女優だろう」
「ウン……あんな女だっていうぜ。毛唐の船長なんか、よくそんな女をボーイに仕立てて飼ってるって話だぜ。寝台の下の箱に入れとくんだそうだ。自分の喰物を領けてね」
「フウン。そういえば理窟がわかるような気もする。女ならS・O・Sに違えねえ」
「だからよ。この船の船霊様ア、もうトックの昔に腐っちゃってるんだ」

「ああ嫌（いや）だ嫌だ。俺（おら）アゾオッとしちゃった」

「だからよ。船員（みんな）は小僧を見付（みつけ）次第タタキ殺して船霊様（ふなだまさま）を浄（きよ）めるって云ってんだ。汽罐（かま）へブチ込めやあ五分間で灰も残らねえってんだ」

「おやじの量見が知れねえな」

「ナアニヨ。S・O・Sなんて迷信だって機関長に云ってんだそうだ。俺の計算に、迷信が這入（はい）ってると思うかって機関長に喰（く）ってかかったんだそうだ」

「機関長は何と云った」

「ヘエッて引き退（さが）って来たんだそうだ」

「ダラシがねえな。みんなと一所に船を降りちまう

ぞって威（おど）かしゃあいいのに」
「駄目だよ。ウチの船長（おやじ）は会社の宝物（ほうもつ）だからな。チットぐれえの気紛（きまぐれ）なら会社の方で大目に見るにきまっている。船員（のりくみ）だって船長（おやじ）が桟橋に立って片手を揚げれや百や二百は集まって来るんだ」
「それあそうかも知れねえ」
「だからよ。晩香坡（バンクーバ）に着いてっからＳ・Ｏ・Ｓの女郎（めろう）をヒョッコリ甲板（デッキ）に立たせて、ドンナもんだい。無事に着いたじゃねえかってんで、コチトラを初め、今まで怖がっていた毛唐連中をギャフンと喰（く）らわせようって心算（つもり）じゃねえかよ」

「フウン。タチがよくねえな。事によりけりだ。コチトラ生命（いのち）がけじゃねえか」
「まったくだよ。船長（おやじ）はソンナ事が好きなんだからな」
「機関長も船長（おやじ）にはペコペコだからな」
「ウムウム。この塩梅（あんばい）じゃどこへ持ってかれるかわからねえ」
「まったくだ。計算にケチが付かねえでも、アタマにケチが付けあ、仕事に狂いが来るのあ、おんなじ事じゃねえかな」
「そうだともよ。スンデの事にタッタ今だって、S・

Ｏ・Ｓだったじゃねえか」
「ああ。いやだいやだ……ペッペッ……」
コンナ会話を主檣（メインマスト）の蔭で聞いた俺は、何ともいえない腐った気持になって、霧の中を機関室へ降りて行った。……これが迷信というものだかどうだか知らないが、自分の頭の中まで濃霧（のうむ）に鎖（とざ）されたような気になって……。

それから三日ばかりした真夜中から、波濤（なみ）の音が急に違って来たので眼が醒（さ）めた。アラスカ沿岸を洗う暖流に乗り込んだのだ……と思ったのでホッとして万年

寝床(ベッド)の中に起上(たちあが)った。

同時に船橋(ブリッジ)から電話が来て、すぐに半運転を全運転に切りかえる。霧笛(むてき)をやめる。探照燈を消す。機関室は生き上(あが)ったように陽気になった。一等運転手の声が電話口に響いた。

「石炭はドウダイ」

「桑港(シスコ)まで請け合うよ。霧は晴れたんかい」

「まだだよ。海路(コース)は見通しだが空一面に残ってるもんだから天測が出来ねえ」

「位置も方角もわからねえんだな」

「わからねえがモウ大丈夫だよ。サッキ女帝星座(カシオペヤ)が、

ちょうどそこいらと思う近処(きんじょ)へウッスリ見えたからな。すぐに曇ったようだが、モウこっちのもんだよ」

「アハハハ。S・O・Sはどうしたい」

「どっかへフッ飛んじゃったい。船長(おやじ)は晩香坡(バンクーバ)から鮭(さけ)と蟹(かに)を積んで桑港(シスコ)から布哇(ハワイ)へ廻わって帰るんだってニコニコしてるぜ」

「安心したア。お休みい……」

「布哇(ハワイ)でクリスマスだよオオ――だ……」

「勝手にしやがれエエ……エ……だ……」

「アハアハアハアハアハ……」

ところがこうした愉快な会話が、霧が晴れると同時

にグングン裏切られて行ったから不思議であった。

夜が明けて、霧が晴れてから、久し振りに輝き出した太陽の下を見ると、船はたしかに計算より遅れている。しかも航路をズッと北に取り過ぎて、晩香坡とは全然方角違いのアドミラルチー湾に深入りして雪を被った聖エリアスの岩山と、フェア・ウェザー山の中間にガッチリと船首を固定さしているのには呆れ返った。……船長と運転手の計算も、又は俺の腹加減までもが、ガラリと外れてしまっていたのだ。

そればかりではない。

船に乗ってアラスカ近海へ廻わった経験のある人間

でなければ、あの近海の波の大きさと、恐ろしさはチョット見当が付きかねるだろう。こんな処でイクラ法螺（ほら）を吹いても、あの波濤（なみ）のスバラシサばっかりは説明が出来ないと思うが、何もかも無い。これが波かと思う紺青色（こんじょういろ）の大山脈が、海抜五千米突（メートル）の聖（セント）エリアス山脈を打ち越す勢いで、青い青い澄み切った空の下を涯（は）てしもなく重なり合いながら押し寄せて来る。アラスカ丸は七千噸（トン）だから荷物船（カーゴボート）では第一級の大型だったが、たとい七千噸が七万噸でもあの波に引っかかったら木（こ）っ葉（ぱ）も同然だ。

一つの波の絶頂に乗上げると、岩と氷河で固めた恐

ろしい恰好（かっこう）の聖（セント）エリアスが直ぐ鼻の先に浮き上る。文句なしに手が届きそうに見える。これは、空気が徹底的に乾燥しているから、そんなに近くに見えるんだが、水蒸気の多い日本から行くと特別にソンナ感じがするんだ。望遠鏡で覗（のぞ）いてもチットも霞（かす）んで見えない。山腹を這（は）う蟻（あり）まで見えやしまいかと思うくらいハッキリと岩の角々が太陽に輝いている……と思う間に、その大山脈の絶頂から真逆落（まっさかおと）しに七千噸の巨体が黒煙（くろけむり）を棚引（たなび）かせて辷（すべ）り落ちる。スキーの感じとソックリだね。高い高い波の横っ腹に引き残して来る推進器（スクリュウ）の泡をジイッと振り返っていると、七千噸の船体が千噸ぐ

らいにしか感じられなくなって来る。
……と思ううちに、やがて谷底へ落ち付いた一刹那(せつな)、次の波の横っ腹に艦首(トップ)を突込んでドンイイインと七噸から十噸ぐらいの波に艦首(トップ)の甲板(デッキ)をタタキ付けられる。グーンと沈んで甲板をザアザアザアと洗われながら次の大山脈のドテッ腹へ潜(もぐ)り込む。何(なん)しろ船脚(ふなあし)がギッシリと重いのだから一度、大きな波(やつ)にたたかれると容易に浮き上らない。船室(ケビン)という船室(ケビン)の窓が、青い、水族館みたいな波の底の光線に鎖(とざ)されたまま、堅板(パーテカル)や、内竜骨(キールソン)が、水圧でもって……キイッ……キイッ……キシキシキシキシキシと鳴るのを聞いていると、それだけの

水圧を勘定に入れた、材料強弱（ストレングス・オブ・マテリヤルス）の公式一点張りで出来上っている船体だとわかり切っていても決していい心持ちはしない。そのうちにヤット波の絶頂まで登り詰めてホットしたと思う束の間に、又もスクリュウを一シキリ空転さして、潮煙（しおけむり）を捲立（まきた）てながら、文字通り千仭（せんじん）の谷底へ真逆落しだ。これを一日のうちに何千回か何万回か繰返すと、機関室の寝床（ベッド）にジッと寝転んでいても、ヘトヘトに疲れて来る。

「オイオイ。機関長か……」

船長室から電話がかかる。

「僕です。何か用ですか」

「ウン。もっとスピードが出せまいか」
「出せますが、何故（なぜ）ですか」
「船がチットも進まんチウて一等運転手（チーフメート）が訴えて来（き）おるんだ」
「今十六節（ノット）出ているんですがね。義勇艦隊のスピードですぜ」
「馬鹿。出せと云ったら出せ」
「ドレ位ですか」
「十八ばっか出しちくれい」
「最大限（フル）ですね」
「ウン。石炭（すみ）は在るかな」

「まだ在ります。全速力(フル)で四五日分……」
「……ヨシ……」
　ガチャリと電話が切れたと思うと、やがて船腹(ふなばら)を震撼(しんかん)する波濤(なみ)の轟音(おと)が急に高まって来た。タッタ二節(ノット)の違いでも波が倍以上大きくなったような気がする。又実際、船体のコタエ方は倍以上違って来るので、石炭の消費量でもチットやソットの違いじゃない。
　そのうちに高緯度の癖で、いつとなく日ばボンヤリと暮れて、地獄座のフットライト見たいなオーロラがダラダラと船尾(スターン)にブラ下った。その下の波の大山脈の重なりを、夜通しがかりで白泡(しらあわ)を嚙(か)みながら昇ったり

降ったり、シーソーを繰り返して翌る朝の薄明りになってみると、不思議な事に船体は、昨日の朝の通り聖エリアスとフェア・ウェザーの中間に船首を固定さしている。昨日から固定していたんだか、夜の間に逆戻りしたんだかわからない。

「どうしたんだ」

「シッカリしろ」

とか何とか運転手と文句を云い合っているうちに、昨日の朝の通りの白い太陽がギラギラと出て来た。空気が乾燥しているから岸の形がハッキリしている。山腹を這う蟻の影法師まで見えそうである。

流石（さすが）に沈着な船長もコレには少々驚いたらしい。船橋（ブリッジ）に上（のぼ）って、珍らしそうに白い太陽を凝視している。その横に一等運転手がカラも附けないまま寒そうに震えている。

「逆戻りしたんだな」

「イヤ。波に押し戻されているんです。十八節（ノット）の速力（スピード）がこの波じゃチットモ利かないんです」

「そんな馬鹿な事が……」

「いや実際なんです。去年の波とはタチが違うらしいんです」

「おんなじ波じゃないか」

「イヤ。たしかに違います」

一等運転手と船長がコンナ下らない議論をしているところへ、俺は危険を冒(おか)して梯子(ラダ)を這い登って行った。船長は、真向いの聖(セント)エリアスの岩山に負けない位のゴツゴツした表情で云った。

「モウ……スピードは出ないな。機関長(おやかた)……」

「出ませんな。安全弁(バルブ)が夜通しブウブウいっていたんですから」

「……弱ったな……」

この船長が、コンナ弱音を吐いたのを俺はこの時に初めて聞いた。

「……妙ですねえ。今度ばかりは……変テコな事ばかりお眼にかかるじゃないですか」
「あの小僧を乗せたせいじゃないかな。チョットでも……」
と一等運転手がヨロケながら独言（ひとりごと）のように云った。
蒼白（あおじろ）い、剛（こ）わばった顔をして……俺は強く咳払（せきばら）いをした。
「エヘン。そうかも知れねえ。しかし最早（もう）船には居ねえ筈だからな」
船長は何も云わなかった。苦い苦い顔をしたまま十八倍の双眼鏡を聖（セント）エリアスに向けた。

三人はそのまま気拙い思いをして別れたが、それから第三日目の朝になっても、依然としてフェア・ウェザーとセント・エリアスが真正面に見えた時には、流石の俺も、ジイイーンと痺れ上るような不思議を、脳髄の中心に感じた。同時に何ともいえない神秘的な気持になって、胸がドキドキした事を告白する。自分の魂が、船体と一所に、どうにもならない不可思議な力にガッシリと摑まれているような気がしたからだ。

石のように固ばった俺と、一等運転手と、船長の顔がモウ一度、船長室でブツカリ合った。

「ここいらを北上する暖流の速力が変ったっていう報告はまだ聞きませんよ」

　運転手が裁判の被告みたような口調で船長に云った。

船長が他所事(よそごと)のようにネービー・カットの煙を吹いた。

「ムフムフ。変ったにしたところが、一時間十八節(ノット)の船を押し流すような海流が、地球表面上に発生し得(う)る理由はないてや」

　と飽くまでも科学者らしく嘯(うそぶ)いた。俺もエンチャントレスに火を付けながら首肯(うなず)いた。

「とにかく俺のせいじゃないよ。石炭はたしかに減っているんだからな」

一等運転手（チーフメート）も眼を白くしてコックリと首肯（うなず）いた。同時に一層青白くなりながら白い唇を動かした。

「……何か……あの小僧の持物でも……船に……残っているんじゃ……ないでしょうか」

船長は片目をつむって、唇を歪（ゆが）めて冷笑した。しかし一等運転手は真顔（まがお）になって、真剣に腰を屈（かが）めながら、船長室内のそこ、ここを覗（のぞ）きまわり初めた。おしまいには船長と俺が腰をかけている寝台（ねだい）までも抱え上げて覗いたが、寝台の下には独逸（ドイツ）や仏蘭西（フランス）の科学雑誌が一パイに詰まっているキリであった。ボーイのスリッパさえ発見出来なかった。

とうとう船全体が、動かす事の出来ない迷信に囚われて、スッカリ震え上がらせられてしまった。乗組員の眼付は皆オドオドと震えていた。

……船が動かない……S・O・S小僧の祟りだ……。

晴れ渡った青い青い空、澄み渡った太陽。静かな、切れるような冷めたい風の中で、碧玉のような大濤に揺られながらの海難……。

……行けども行けども涯てしのない海難……S・O・Sの無電を打つ理由もない海難……理由のわからない……前代未聞の海難……。

「サアサア。みんな文句云うところアねえ、在りった

けの石炭(すみ)を悉皆(みんな)、汽鑵(かま)にブチ込むんだ。それで足りなけあ船底(ダンブロ)の木綿の巻荷(ロール)をブチ込むんだ。それでも足りなけあ俺から先に汽鑵(かま)の中へ匍(は)い込むんだ。ハハハ。サアサア。みんな石炭(すみ)運びだ石炭(すみ)運びだ……」

事実石炭は最早(もう)、残りがイクラも無かったのだ。横浜(はま)で積込(つみこ)んだ時の苦労を逆に繰返して、飛んでもない遠方から掘り出すようにしいしい、機関室へ拾い集めるのであったが、その作業を初めると間もなく、残炭(のこり)を下検分(したみ)に廻わった二等機関士のチャプリン髭(ひげ)が、俺の部屋へ転がり込んで来た。

「……タ……大変です。S・O・Sの死骸が見つかり

ました」

「ナニ。S・O・S……伊那の死骸がか……」

「エエ。そうなんです……ああ驚いた。ちょっとその水を一パイ。ああたまらねえ」

「サア飲め。意気地無し。どこに在ったんだ」

「ああ驚いちゃった。料理部屋の背面（うしろ）なんです。あすこの石炭（すみ）の山の上にエムプレス・チャイナの青い金モール服を着たまんま半腐りの骸骨になって寝ていたんです。イガ栗頭の恰好（かっこう）があいつに違いないんですが」

「骸骨……？……」

「ええ。あそこは鉄管（パイプ）がゴチャゴチャしていてステキに暑いもんですから腐りが早かったんでしょう。白い歯を一パイに剝（む）き出してね。蛆（うじ）一匹居なかったんですが……随分臭かったんですよ」

俺は黙って鉄梯子（てつばしご）を昇って、中甲板（ちゅうかんぱん）の水夫部屋に来た。入口に摑（つか）まって仁王立（におうだ）ちになったまま大声で怒鳴った。

「おおい。兼公（かねこう）居るかア。出歯（でっぱ）の兼公……生首（なまくび）の兼公は居ねえかア……」

「おおオ――……」

と隅ツコの暗い寝台棚から、寝ぼけたらしい声がした。

「誰だあ……」

「おれだあ……」

「おお。地獄の親方さんか。これあどうも……」

「済まねえが一寸、顔を貸してくれい」

「ウワアア。とうとう見付かったかね」

「シッ……」

と眼顔で制しながら兼公を水夫食堂へ誘い込んだ。

天井の綱にブラ下りながら兼に金口煙草を一本呉れた。

兼はしきりに頭を掻いた。

「どうも横浜(はま)じゃ、警察が怖(こ)わーがしたからね。つい秘密(ないしょ)にしちゃったんで……」
「石炭(すみ)運びの途中で殺(や)ったんか」
「図星(ずぼし)なんで……ヘエ。もっとも最初(はじめ)から殺(や)る気じゃなかったんで、みんながあの小僧は女だ女だって云いましたからね。仕事にかからせる前にチョット調べて見る気であすこに引っぱり込んだんで……ヘエ……」
「馬鹿野郎……そんで女だったのか」
「それがわからねえんで……あすこへ捻(ね)じ伏せて洋服を引んめくりにかかったら恐ろしく暴れやがってね」
「当前(あたりまえ)だあ……それからどうした」

「イキナリ飛び付きやがって、ここん処をコレ……コンナに喰い切りやがったんで……」
兼は菜葉服とメリヤスの襯衣をまくって、左腕の力瘤の上の繃帯を出して見せた。
「まだ腫れてんで……ズキズキしてるんですがね……恐ろしいもんですね」
「間抜けめえ。そん時に手前裸体だったのか」
「エヘヘヘヘヘ」
「変な笑い方をしるねえ。それからどうした」
「わっしゃカーッとなっちゃってね。コイツ奴、降りるといったって他の船へ乗れあ、又、災難をしやがる

んだからここで片付けた方が早道だ。男だか女だか殺(おと)してから検査(しらべ)た方が早道だと思っちゃったところへ、血だらけの口をしたS・O・Sの野郎が、私の横ツ面(つら)へ喰い切った肉をパッと吹っかけて「悪魔」とか何とか悪態を吐(つ)きやがったんで……手前(てめえ)の悪魔は棚へ上げやがってね。……おまけに後で船長(おとっさん)に告訴(いいつ)けてやるから……とか何とか吐(ぬ)かしやがったんでイヨイヨ助けておけないと思って、首ツ玉をギューッと……まったくなんで……ヘエ……」

「非道(ひど)い事をするなあ。そんで女だったかい」

「……それがその……野郎なんで……」

「プッ。馬鹿だなあ。それからどうしたい」

「それっきりでさ。……ウンザリしちゃって放(ほ)ったらかして来ちゃったんです」

「何故(なぜ)海に投(ほう)り込まねえ」

「それが誰にも見つからねえように放り込みたかったんで……親方や機関室(ダンブロ)の兄貴(あにき)達にも申し訳ねえし、おまけに上海(シャンハイ)で、あっしが談判に行った時に船長(おやじ)が入歯をガチガチさして、こんな事を云ったんです。あの小僧をタタキ殺すのに文句はないが……」

「チョット待ってくれ。たたき殺すのに文句はないって云ったんだね」

「そうなんで……しかし死骸は勿論、髪の毛一本でも外へ持ち出したら只（ただ）はおかないぞッ……てね。そう云って船長（おやじ）に白眼（にら）み付けられた時にゃ、あっしゃゾッとしましたぜ。あんな気味の悪い面（つら）ア初めてお眼にかかったんで……ヘエ……まったくなんで……」

「フーム。妙な事を云ったもんだな」

「そう云ったんで……何だかわからねえけども……万一見付かって首になっちゃ詰まらねえ。事によるとあの二挺（ちょう）のパチンコで穴を明（あ）けられちゃ叶（かな）わねえと思って、そのまんまにしといたんです。まったくなんです」

「案外意気地がねえんだな……手前（てめえ）は……」

「まったくなんで……それからっていうものあの死骸の事が気になって気になって今日は運び出そうか、明日（あす）は片付けようかと思ううちに、だんだん船にケチが附いて来るでしょう……死骸は腐って手が付けられなくなって来るし、わっしゃもう少しで病気になるところだったんで……もう懲（こ）り懲（ご）りしました。どうぞ勘弁（かんべん）しておくんなさい。あやまっても追付（おっつ）くめえけんど……」

「ハハハ。そんな事（こた）アもうどうでもいいんだ。今日は文句はねえ。手前（てめえ）行って大ビラであの死骸（コツ）を片付けて

来い。船長(おやじ)には俺が行って話を付けてやる」

「ヘエッ。本当ですかい親方ア」

「同じ事を二度たあ云わねえ」

「……ありが……ありがとう御座(ござ)んす。すぐに片付けます。……ああサッパリした」

「馬鹿野郎……片付けてからサッパリしろ」

兼はＳ・Ｏ・Ｓの金モールの骸骨(コツ)を胴中(どうなか)から真二(まふた)つにスコップでたたき截(き)って、大きなバケツ二杯に詰めて出て来た。甲板に出て生命綱(いのちづな)に掴(つか)まり掴まり二つのバケツを海の上へ投げ出したが、その骨の一片が、波にぶつかって、又、兼の足元へ跳ね返って来た時、兼

は真青になってその骨を引掴むと危くツンノメリながら、
「南無阿弥陀仏ッ……」
と遠くへ投げた。
それは兼の一生懸命の震え上った念仏らしかったが、とてもその恰好が滑稽だったので、見ていた俺はたった一人で腹を抱えさせられた。
アラスカ丸は、それから何の故障もなくスラスラと晩香坡へ着いた。
同じ波の上を、同じスピードで……馬鹿馬鹿しい話だが、まったくなんだ。

ところで話はこれからなんだ。

船長の横顔は見れば見るほど人間らしい感じがなくなって来るんだ。

骸骨（コツ）を渋紙で貼（は）り固めてワニスで塗り上げたような黒光りする凸額（おでこ）の奥に、硝子玉（ガラスだま）じみたギラギラする眼球（めだま）が二個（ふたつ）コビリ付いている。それがマドロス煙管（パイプ）を横一文字にギューと啣（くわ）えたまま、船橋（ブリッジ）の欄干（てすり）に両肱（ひじ）を凭（も）たせて、青い青い空の下を凝視しているんだ。その乾涸（ひから）びた、固定した視線の一直線上に、雪で真白になった晩香坡（バンクーバ）の桟橋がある。その向う一面に美しい燈火（ともしび）が

ズラリと並んでいようという……ところまで、やっと漕(こ)ぎ付けたんだがね。文字通りに……。

その桟橋の上に群がっている人間は、五日ほど遅れて着いたアラスカ丸をどうしたのかと気づかって、待ちかねていた連中なんだ。

「S・O・Sの野郎……骸骨(ほね)になってまで祟(たた)りやがったんだナ……」

船長(おやじ)が突然(だしぬけ)に振返って俺の顔を見た。白い義歯(いれば)を一ぱいに剥(む)き出して物凄(ものすご)く哄笑(こうしょう)したもんだ。

「アハハハハ。イヤ……面白い実験だったね。やっぱり理外の理って奴は、あるもんかなあ……タハハハ。

ガハハハハハ……」

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房
1992（平成4）年3月24日第1刷発行
※表題の「難船小僧」には、「S・O・S・BOY」とルビがふられています。
入力：柴田卓治
校正：kazuishi
2004年6月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。